

落ちぶれた浪人が、助けた河童と共に流れ星
を追ひ、生きる力を取り戻す

流星の侍

作・ほら

「流星の侍」・登場人物

次郎丸（34）：かつては強い侍だったが、今はやる気のない浪人。

おりょう（27）：次郎丸の妻。

子河童（？）：次郎丸が会える宇宙人の子供。

父河童（？）：子河童の父。

中盆

ツボ振り

山賊たち

先手組たち

○ 1 次郎丸の借家・夕方

寂れた借家から眠そうに出て行く次郎丸（34）。

妻のおりようが刀を持ってきて次郎丸に声をかける。

おりよう 「次郎丸さん、また刀を忘れてますよ」

次郎丸、刀を受け取りながらぼやく。

次郎丸 「落ちぶれた浪人に今更何を切れと言うのだ」

おりよう 「切ろうが切るまいがとにかく稼いできてください。このままでは……」

次郎丸 「わかっておる、おりよう。この次郎丸、今宵こそたんまり勝って帰ってくる」

おりよう 「それ、毎晩聞いてますよ」

次郎丸 「毎晩そのつもりだ。いつてくる」

おりよう 「いつてらっしゃい」

次郎丸、欠伸をしながら歩いて行く。

○ 2 江戸の町と空

夕暮れから、夜になり、一筋の流れ星が光る。

タイトル「流星の侍」

○ 3 賭場・夜

明かりのついた賭場の外観。にぎやかな声が漏れている。

○ 4 同・屋内

大勢の男が丁半で盛り上がる。

次郎丸、おちよこを片手に酔っ払っている。

次郎丸、手元のコマを全部差し出して、

次郎丸 「これ全部、丁！」

盛り上がる会場。

中盆 「次郎丸さんよ、悔やんでも知らね

えぞ」

次郎丸 「ちようどいい。悔み飽きてもう悔やむものもなかったところだ」

ツボ振りがツボを振る。

出た目は、五、二の半。

絶句する次郎丸。

○ 5 橋の上・夜中

手すりに座って次郎丸がひとり煙草をふかしている。辺りは無人。

次郎丸 「悔み飽き、なお悔やまれる我が人生：腰にささった刀も錆びゆき：」

その時、夜空を切り裂く強烈な光。次郎丸の頭上を通過し、流れ星が山向こうへ尾をひいて落ちていく。

次郎丸、慌てて手すりから橋へ飛び降りる。

次郎丸、辺りを見回す。誰もいない。家々は暗いまま。

次郎丸 「なんだあれは：」

○ 6 次郎丸の借家・玄関・翌朝

次郎丸、刀を腰にさし、見送るおりょうを振り返る。

次郎丸 「では、いつてまいる」

おりょう 「本当に稼いで帰って来るんですね、今度こそ」

次郎丸 「言っただろう。あの流れ星が形を残していれば、とんでもない高値で売れるかもしれん。そうすれば、我が家は一気に安泰だ。しかも、あの流れ星はおそらく俺しか見ていない」

おりょう 「全財産失って、気でもおかしくなっただんですか」

次郎丸 「主人を信じろ、おりょう。お前を飢え死にさせるようなことはせん」

おりょう 「とにかく、気をつけてくださいね」

○ 7 町外れ、山道の入り口・昼

次郎丸が歩いていると、馬に乗った先手組が次郎丸を追い抜いていく。
先手組たちは山道へ入っていく。

次郎丸 「夜明けを待つんではなかったな…」
次郎丸、走りだす。

○ 8 山道・昼

次郎丸、走り疲れて立ち止まり、木の陰に座り込む。

次郎丸 「ふう…刀がこんなに重いとはな…」
そこへ、茂みの奥からおかしな声がする。

謎の声 「お主！お主！」

次郎丸、刀のツカを握って振り返る。

次郎丸 「何者！」

しかし、近くには誰もいない。

謎の声 「こっちだ。来てくれ。頼む」

次郎丸、恐る恐る声のする方へ歩いて行く。

○ 9 山道の茂みの奥・昼

次郎丸、茂みの中を見回しながら歩き、何かを発見して驚く。

次郎丸 「な、何者だ！」

次郎丸が見つけたのは、金属製の動物用罠にハマった、全身緑色の子供
甲羅のようなバッグを背負って、くちばしのようなマスクをつけ、
足をおさえてうずくまっている。どう見ても、子供の河童だ。
くちばし型のマスクから合成音のような声が出る。

子河童 「おお、侍、私を助ける」

次郎丸 「その前に、何者だ、お主。忍びか？

妖怪か？」

子河童 「助けてくれたら説明してやる」

次郎丸 「な、なんだその態度は。ならば、よい。俺は急いでいるからな」

子河童 「どこにだ？流れ星の落ちた場所にか？」

次郎丸 「なぜそれを：貴様、何か知っているのか」

子河童 「助けてくれたら教えてやる」

次郎丸 「ぬう：態度が気に食わんが、仕方ない」

× × ×

毘を解かれた子河童。足にアルミホイ
ルのような包帯を巻いている。

子河童 「助かった。侍、よくやった」

次郎丸 「さあ教えろ。あの流れ星のこと、
ついでに貴様が何者か」

子河童 「時間がない。移動しながら話す。
ついて来い」

包帯を巻き終わると、スタスタと走り
だす子河童。

次郎丸 「生意気な：おい待て」

次郎丸、子河童を追いかける。

○ 10 山道の続き・昼

びよんびよん跳ねながら進む子河童と、
小走りで追いかける次郎丸。

子河童 「私はあの流れ星で、今宵帰らねば
ならない」

次郎丸 「はっはっは。帰る？あれは空を
ゆく光る船だとも言うのか」

子河童 「するどいな。その通りだ」

次郎丸 「そんなものあるわけなからう」

子河童 「ではお主、私のような者を見たこ
とはあったか」

次郎丸 「あるわけなからう」

子河童 「本当は話してはならぬのだが、お
主は私を助けたので、特別に話す。

私は違う星から来た。そして今宵、あの船

で帰るのだ」

次郎丸 「ちがうほしだと？」

子河童 「いいか、空に輝くあの星は、ひとつひとつ」

次郎丸 「結構。お主の目的はどうでもいい。俺が知りたいのはそのお主の船に、金になるものがあるのかどうかだけだ」

子河童 「金になるかどうかはわからぬが、お主らの世にないものしかないと思うぞ」

次郎丸 「ふむ。まあよい。貴様を助けた礼に、何か譲れ」

子河童 「ならぬ。技術を与えてはならん規則だ」

突然、2人の行く手に山賊が3人現れる。

山賊 「これはこれはお侍さん、なんだそいつは」

次郎丸 「なんでもよかろう。急いでいる。道を開けろ」

山賊 「その変な生き物をよこせ。そうすれば通してやろう」

次郎丸、子河童の方を見て言う。

次郎丸 「ああ申しておるが：どうする？」

子河童、しぶしぶ答える。

子河童 「：わかった。お主が私を無事に船に送り届れば、何か金になりそうなものを譲る」

次郎丸 「良い選択だ。（山賊に向かって）断る。通してもらうぞ」

山賊 「この野郎」

山賊たち、次郎丸と子河童に襲いかかる。

次郎丸、刀を抜こうとする。が、錆びついて鞘から抜けない。

次郎丸 「しまった！」

子河童 「なにをしている！」

次郎丸、山賊の刀の一振りを、自分の刀の鞘で受け止め、子河童に言う。

次郎丸 「走れ！」
子河童 「頼りにならん侍だ！」

子河童、走りだす。山賊2人、追う。
次郎丸、刀で襲いかかってきた山賊を
鞘でぶちのめし、

残り2人の山賊を追う。

次郎丸、刀を抜こうとするが、まだ抜
けない。

仕方なく、また鞘ごと刀を振り回し、
山賊2人をぶちのめす。

次郎丸が山賊を仕留めたことに気がつ
いた子河童、立ち止まる。

子河童 「お主が強いのか相手が弱いのかわ
からぬな」

次郎丸 「助けたことには変わりないだろう。
男の約束、忘れるでないぞ」

子河童 「仕方がない：しかしなんだあの野
蛮な侍は？」

次郎丸 「ひとり見覚えのある顔があった。
元は侍のはずだが、主を失い山賊に落ちた
のだろう」

子河童 「主がいないとあかも野蛮になつて
しまうのか」

次郎丸 「戦なき世に、侍の居場所はなかな
かないのだ」

子河童 「戦がないのは良いことではないのか？」

次郎丸 「そうかもしれぬ。だが戦うことし
か知らぬ我々が、これからどう生きてゆけ
ばよいのか、皆目見当もつかぬ」

子河童 「違う生き方もあるだろう。私の父
も、昔は戦士だった」

次郎丸 「ほう。お主の国にも侍がおるのか」
子河童 「似たようなものだ。だが私が生
まれてから、いわゆる職人になった。船に
乗って違う星に行き、戦士のときとは違う
生き方をしている。私はその手伝いでこの
星に來たのだ。お主が見た流れ星は、父が
私を迎えに來た船だ」

次郎丸 「なるほど：お主の父上に会えたら、

少しばかり相談でもしてみろかな」

子河童 「ならば急ぐぞ。船が先のような野蛮なやつらに見つかつたら大変だ」

走って行く2人。奥の空、陽が落ち始めている。

○11 山奥・船が着陸している場所・近くの茂み・夜

池のほとりに、たまご型の宇宙船が傾いて着陸している。

宇宙線は鎖で近くの木につながれている。

辺りには煙が充満している。

先手組が数人、うろろして宇宙船を調べている。

子河童と同じような姿をした父河童が、先手組にとらわれ、

手に縄をつながれている。

茂みの影からそれを見ている次郎丸と

子河童。

子河童は怒りに震えている。

子河童 「あいづらめ：父になんてことを。許さん」

次郎丸 「先手組は手強い：さすがに俺ひとりではどうにもできん」

子河童 「ならばどうする。このままでは……」

次郎丸 「父上は元戦士ではないのか。なぜ戦わない」

子河童 「違う星で争いを起こせば、重罪に問われる」

次郎丸 「仕方がない：。俺が先手組をひきつける。お主は船に乗り、出航に取り掛かれ」

子河童 「父はどうするのだ」

次郎丸 「なんとかしてみる」

子河童 「都よりないな：しかし今はお主しか頼れん」

次郎丸 「お主はいつもひとこと余計だ」
子河童、腕につけていた通信機を次郎

丸に渡す。

子河童 「約束の品だ。これでは船からは何も取れぬからな」

次郎丸 「なんだこれは」

子河童 「通信機だ。壊れて通信はできないが、時刻だけはわかる」

次郎丸 「果たして金になるか？」

子河童 「研究して、商売にすればいいだろう。とにかく、早く父を」

次郎丸 「おお。とにかく、受け取った。約束は果たそう。お主を無事船に返す」

○ 1 2 山奥・船が着陸している場所・船のそば・夜

先手組たちの前に、次郎丸が歩いてくる。

次郎丸 「ご苦労でござるなあ、こんな夜に、こんな山奥で」

先手組 「なんだ貴様は」

次郎丸 「失礼、拙者、通りがかりの名も無き侍、いや、浪人でござる」

先手組 「何の要だ。邪魔だ、去れ」

次郎丸 「その緑色の異人、我が友人であります」

先手組 「はっはっは。この妖怪が友人とはふざけたことをぬかしおる」

次郎丸 「我が異国の友人に無礼な扱い、ただちにおやめいただきたく……」

先手組 「おい。調子に乗るなよ。たたっ斬るぞ！」

先手組たちに囲まれる次郎丸。次郎丸、刀に手をかける。

次郎丸 「たたっ斬るならこちらも得意でし
てね……」

目配せする次郎丸。

目線の先には、先手組が次郎丸に気をとられた好きに宇宙船に入っていく

子河童。

先手組たちが刀を抜く。にらみ合い。

○ 1 3 次郎丸の借家・夜

轟音の中、戸を開けて外に出てくるおりよう。

空を見て、驚き、呟く。

おりよう 「次郎丸さん！」

○ 1 4 江戸の町・夜

山の奥から、轟音とともに、ロケットの発射のような一筋の光が空に向かって伸びていく。空にはオーラが発生している。

○ 1 5 次郎丸の借家・翌朝

心配そうに玄関外で辺りを見回すおりよう。

遠くから歩いてくる、ボロボロの次郎丸の姿を発見。

走ってかけより、次郎丸に抱きつく。

おりよう 「次郎丸さん……！」

次郎丸 「すまぬ、すぐ金になりそうなのはなかった」

おりよう 「いいんです、無事なら……昨日の騒ぎで、次郎丸さんに何かあったのではともう心配で心配で……」

次郎丸 「なんともござらん。すぐ金にはならんが、土産はあるぞ」

次郎丸、着物から、子河童からもらった通信機を取り出す。

おりよう 「なんですか、これは」

次郎丸 「なにかにするのだ、これから」

おりよう 「もう、なんでもいいです。おか

えりなさい、次郎丸さん」

次郎丸 「おう。次郎丸、ただいま帰った」
次郎丸、スッキリした笑顔。 終